

ひどく静かな夜 (Very quiet night／ليلة هادئة جدًا)

ひどく静かな戦争の夜。昨夜は本当に静かだった。一時間くらいはまどろむことができた。ドローン、戦闘機、砲撃の音がずっと聞こえていたけど、ミサイルや1トンの火薬が一気に降ってくるのに比べたらどうってことない。1トン爆弾が地面を持ち上げ激しく揺さぶるさまは、まるで、ぱんぱんに膨れた子供の風船だ。今にも爆発して世界を破壊してしまう。死を千回目撃したら、次は自分の番だとしか思えない。爆発と死を待つ私に残された時間は、せいぜい1分か、1秒か。

本当に静かな夜だった。あまりにも静かなので、私たちは、30人で豆の缶詰を2つ、夕食に食べることができた。信じられない贅沢、まるで豆を讃える大パーティー！けれど、パンが足りないのでパーティーは台無しだった。実を言うと、私がパーティーを台無しにした張本人だ。

夕食前、通りに立つ私の前に、二人の少女を連れた男がやってきて、「パンを惠んでくれ」と言った。「パンだけでいい、娘に食べさせたい。もう3日も食べていないんだ。」「パンはない」最初私はそう答えた。しかし、私を見つめる少女たちの瞳が、まるで弾丸のように私の心に撃ち込まれた。私は手元にあったパンの半分を差し出した。その時の様子を、私は死ぬまで決して忘れないだろう。

彼は震える手でパンを受け取り、少女たちの瞳は輝きを取り戻はじめた。彼は私にお礼を言うとすぐに立ち去った。まるで、誰にも見られたくない貴重な戦利品をもって逃げるかのようだ。

時に静けさは退屈になる。特に、真夜中に友人からの電話で、幼馴染のアドナーンとその家族が殉死したと聞いたとき。アドナーンの娘、やんちゃなサマルをどれほど私が愛しく思っていたことか。彼女は3歳にもなっていなかった。私が遊びに行くと、サマルはいつも走って私の首に抱きついた。黒い瞳、縮れた髪、年に不似合いな背の高さ。サマルはバスケのチャンピオンになるに違いないと話したものだ。

本当に特別な夜だった。電話を切る前に、私の意に反して涙があふれ出していた。

大きな爆発の音でハッと目が覚めた。続いて聞こえたのは、トタン屋根の上に、激しく雨の降り注ぐ音。いや、違った。それは雨ではなく石が屋根を突き抜けた音だった。ここからほんの20M離れた建物が、何千もの破片になって碎け散ったのだ。一瞬で大きな穴が出来、そこに数十年前から生えていたナツメヤシの木だけが、奇跡的に残っていた。まるで、すべてを目撃するために死ぬのを拒否しているかのようだ。ただ、胸に抱いていたヤシの実はほとんど落ちてしまったが。

なんという致命的な静けさ。アルジャジーラの特派員がこう言った。「戦争開始以来、最も激しい攻撃が行われています。」 静寂のお陰でちゃんと聞こえた。頭がおかしくなりそうだった。こ

の恐ろしい静寂の最中で、私はどうやって言葉を紡いでいるのだろう。いつ死んでもおかしくないのに、私はそれを悲劇だとも思わず、座って文章を書いている。まるで、私の周りで何も起こっていないかのように。私の周りで、地面は揺れ続けているのに。火薬の匂いが鼻腔を満たしているのに。煙が口を満たし、時には家に充満する。爆発は止まらない。もう狂ってしまった。そう思う。あるいは死にかけている。

私は最後の一文字まで抵抗する。私の声を世界に届けるために。雑音に満ちた世界。その世界に私たちのような静寂がないことを願う。あなたたちは自分たちの騒音を楽しめばいい。私たちのニュースから、顔を背ければいい。チャンネルを変えればいい。あなた達は不快な思いをすることを恐れている、目を醒ましてしまうことを恐れている……。さ、どうぞ心地よく眠ってください。

2023年10月10日

アリー・アブー・ヤースィーン

翻訳：溝川貴己

オリジナル (PDF) | [英語](#) | [アラビア語](#) |

わが書斎へ (To my library / إلى مكتبتي)

許してほしい。何ヶ月にもおよぶ戦争のせいで、おまえから離れざるをえないんだ。

戦争とそれがもたらす不幸の意味を知るには、おまえはまさにうってつけだ。だっておまえの中にはレフ・トルストイの代表作『戦争と平和』が住んでいるんだから。だろ？ ブレヒトの『肝っ玉おっ母とその子どもたち』を上演しようとした時には、何度も何度もそれを読み込んだ。おまえは自分の子どもを守る母親の勇気と胆力を手に入れた。だから僕は、狂った戦争がおまえを傷つけることを心配していない。ここにあるすべての本と戯曲を、お前が守るべき子どもだと思ってほしい。

わが愛する書斎よ。知ってる限り、わが家の電力は遮断されている。料理するにも、パンを焼くにも、燃料がない。まるで干し草の山の中から針を探すように、人びとは木切れひとつ、段ボールの切れ端ひとつを探し回っている。だからお前から、人々が本を持っていくことを許して欲しい。それは命をつなぎとめるためだ、子どもに食べさせるためなんだ、この本の著者たちは、人びとのために自らの身を捧げてくれるはずだ。

親愛なる友チエーホフ、アルベール・カミュ、ジャン=ポール・サルトル、
ジャン・ジュネ、シェイクスピア、マフムード・ダルヴィーシュ、サミーフ・アル=カース
イム、ガンナーム・ガンナーム、アルフレッド・ファラグ、アーティフ・アブー・サイフ、
ムハンマド・アル=マーゲート、サアダッラー・ワンヌース、スタニスラフスキ、アウグス
ト・ボアール、おまえの本棚に座している偉大な著者たちはみな喜んで燃える灯火となり、人
びとの腹を満たすだろう。

彼らの言葉は、世界と僕らが、頭よりも心に刻みついている。だから書斎よ、おまえのことは心配していない。ただ残念なのは、自分の成長のためにこれらの本を求める人びとが、もうそれを読めないということだ。

わが大切な書斎よ、大切な、大切な書斎よ。覚えているか？ 1993年、カイロで開催されたアラブ演劇パフォーマンスフェスティバルに参加した日。他の参加者たちはみな家族へのお土産を抱えて帰る中、僕は自分の大きなかばんに、最高にそそられる演劇関係の本を詰め込んだ。重くて、道中大変だった。やっとのことで帰宅したとき、お土産を期待して出迎えてくれた妻と子どもたちに僕が差し出したスタニスラフスキは、ほほえみながらこう言った。「わしに免じてこの演劇バカを許してやってくれ」

わが愛する書斎よ、僕を待っていてくれ。すぐに帰って来るから。そのときは夜を明かして探求しよう。人間の魂を、素晴らしいも不思議なこの世界を、言葉の奇跡と美を、そして輝かしくも偉大な本の書き手たちのことを。

2023年12月31日

アリー・アブー・ヤースィーン

翻訳：原口昇平

わが友 ジャン・リュックへ (My friend／صديقی جان لوك)

ガザについて書いて欲しいという君からの手紙を読んだとき、いつもならすぐに返事するところを、今回は何日も黙ってしまった。私から言葉が逃げてしまったからだ。なぜかはわからない。朝早くに突然のミサイル攻撃で隣の家が倒壊したにも関わらず、私と家族が奇跡的に生き延びたからなのか？それとも、目にする光景があまりにも恐ろしく、どんな言葉よりも雄弁に物語っているからなのか？あるいは、75年以上にわたり日々の殺人、包囲、飢餓、国家テロにさらされている中で、自分たちの大義、権利について声を上げて来たのに、応える者はいなかつた。もう言葉を空虚なものに感じているからなのか？

友よ、昨日、イスラエル占領軍はアル・アハリ病院を爆撃したよ。今わかっているだけでも500人を超える人々が殉教者となった。彼らは、体がバラバラになり、肉の山となった。

私たちは劇作家として、最も残酷な悲劇の一つが「アンティゴネ」であることを知っている。クレオン王はアンティゴネの兄の埋葬を禁じ、アンティゴネは、兄を埋葬しないまま去ることに耐えられなかった。尊厳、価値、権利とは何か……人間であるとは何を意味するのか？あの物語は私たちに問う。アル・アハリ病院で見た頭も手も足もない遺体は、私たちの時代の新たな悲劇だ。

瓦礫の中である老婦人が看護師に向かって、こう話しかけた。「そこに横たわっている手を私に触れさせてくれませんか。指輪で分かりました。私が頼りにしていた娘の手です。朝、ニュースを見るために椅子に座るのを手伝ってくれたその手。私のためにテレビのスイッチを入れてくれたその手。いつも抱きしめてくれたその手、肩を叩いてくれたその手。私の髪をとかし、いつも爪を切ってくれたその手。彼女は私に挨拶し、去り際に私の手にキスをしてくれた。その手は私の力の源でした。彼女に最後のキスをさせてください。そうすれば、娘の体をこれ以上探す必要がなくなります。」

友人よ、私はもう何を書けばいいのかわからない。これが私のメッセージだと思うなら、君の友人たちに読んで聞かせ、感謝の気持ちを伝えてほしい。なぜなら、自由で、誠実な心を持った人間はとても少なくなっていると感じるから。

この手紙をガザから、大好きなラヴァルへ、そして愛するパリへ…… いつか会いましょう。私が、この地球の他の住民と同じように自由になった時に。

2023年10月18日
アリー・アブー・ヤースィーン
翻訳：藤田ヒロシ

二日で戻る (Two days and we will be back / (يَوْمَيْنْ وَبِنْرَجَعْ)

「二日で戻る」これは2023年10月13日金曜日、ガザ中部のデイル・アル・バラ地区への避難民として家を出る際、私が家族に言った言葉です。そして、それは私の祖父であるハッジ・ファレスが1948年のナクバにより故郷であるディムラから移住しなければならなかつたときに、私の両親に言った言葉と全く同じでもあります。私の父と母は、亡くなるまで60年以上もその言葉を繰り返しました。

「二日で戻る」……私の父は、ディムラの家中庭に植えられたシカモアイチジクの木について、そしてその実がどんなに甘く美味しかったか、私によく話してくれました。その実は一年中絶えることがなく、人生でこれ以上美味しいものはない。父はそれを思い出してそう言つては、ため息をつきました。その木はまだ植えられているのか、それとも父たちが町を出たときに彼らの魂が根こそぎにされたように、占領によって根こそぎにされたのでしょうか？私の母は町のすべての道、角、家、家族を思い出していました。母は、家に戻った時に取り出せるようになると、貴重な食器をイチジクの木の下に隠しておいていました。

ナクバから30年経ったある日、親戚が数年ぶりにサウジアラビアから帰国し、今はエレズと呼ばれているディムラを訪れたいと言いました。私は彼と一緒にディムラに行き、父と母も連れて行きました。そこに到着すると、私たちには何も見えませんでした。何もない土地でした。そこに広がるのは廃墟でした。みんな、その場所の詳細を思い出そうと何度も繰り返し辺りを見渡しました。積まれた石、家の残骸、父のイチジクの木はありませんでしたが、いくつかの木々からその場所の詳細が分かりました。みんなは村の地図を描き始めました。ここに井戸があり、イチジク木がそこにあり、そのユーカリの木は私たちの家の前にあった。だから、ここが、私たちの家。

母は驚き、目に涙をためながらイチジクの木の場所に走ってゆくと、素手で地面を掘り始めました。あの日に埋めた食器を探しました。彼女は架空の木の周りを何箇所も何箇所も場所を変え掘り続けました。驚き、涙、悲痛、痛み、そして沈黙がその場を包みました。私はそこに立って彼らを眺めましたが、彼らが受けた大惨事の程度をわかってはいませんでした。父が木を見つけられなかったこと、母が食器を見つけられなかったことだけがとても悲しかった……。私たちはバスに乗って家に帰りました。父はイチジクの木について話し続け、母と私は彼女の料理について話しました。

現在、私たちはデイル・アル・バラ地区で109日間難民生活を続けています。最初の数日間は、戦争の災害から逃れることが最優先で、戦闘や衝突の現場から離れるよう必死で努めました。数か月後、私たちは帰還の夢を見始め、家の細部を思い出し始めました。スマートフォンで撮った家の写真を見返します。台所の細部や、寝室や私たちが眠っていたベッドの細かな様子が見えるまで写真をズームして見ます。人が枕とベッドでしか休めないことの意味を知ります……。私たちが今滞在している友人宅のバスルールの写真は撮っていません。彼の大きな家は約130人が生活していますが、水の供給が難しいため私たちは水の入ったバケツを持って

列に並び、トイレに入ります。私たちは昔のトイレの使用法に戻りました。バスタブの使用は、戦争が始まってから今まで、そこに横になることが私たちの夢の1つになっています。避難民の中にきちんとシャワーを浴びている人はいないでしょう……私たちは皆、バケツに水を入れて運び、少量のシャンプーで体を洗います、もしあればですが……。

「二日で戻る」……戦争の日々は長く、私たちは毎日ニュースを追いかけ、停戦の詳細を見守り、家に戻る夢を見ていますが、それは少しも実現していません。避難民にとって、停戦は家に戻ることを意味します。たとえそこで死ぬことになっても、私たちは幸せに死ねます。

長い時間が経ち、時間の流れが遅くなり、日が長くなり、夜が長くなりました。私たちの日々は常に、家族に食事を提供することと、家に戻ることを待つことという、この比類ない二つを中心回っています。

今日は昨日とは違います……「2日で戻る」……父が私にその言葉を言っていたとき、私は自らに問いかけました。彼らはそんなにも愚かだったのか？これが占領であり、これが戦争であり、帰還には時間がかかることを気付かなかったのか？と……私も同じ罠に落ちたのか？それとも私たちはすぐに家に戻れるのか？何より重要な質問は、家がまだ建っていて、街がまだそこにあるのか？ということ。

見聞きした破壊の酷さのせいで、ガザ市に戻る日が怖くなることがあります。私はガザを愛しています、美しい私の街、私はそれを恋しく思います、キャンプの道や路地、私が育ったビーチキャンプ、漁港や海岸線、無名兵士の広場、パレスチナ広場、オマー・アル・ムクター通り、アル・ナセル通り、アル・タラティニ通り、フィラスマーケット、シェイク・ラドワン、金曜市場……私たちは確実に戻ります、ガザよ。私たちは確実に戻ります、父よ。

二日で戻ります……。

2024年1月31日

アリー・アブー・ヤースィーン

翻訳：藤田ヒロシ

オリジナル (PDF) | [英語](#) | [アラビア語](#) |

おはよう (Good morning / صباح الخير)

友人たちは朝に私から届く「おはよう」というメッセージを読むと安心できることでしょう。ガザでは、毎朝友人や親戚がお互いに「おはよう」と送ります。返信が来るということは、友人がまだ生きていることの知らせとなります。返信がない場合は心配ですが、相手のインターネットが切れている可能性もあります。そのため、友人の返信を一日中待ちます。待って待って、翌朝新しい挨拶を送ります。それでも返信がない場合には次の段階に進み、携帯電話に電話をかける旅が始まり、応答があるかどうかの苦しみへと続きます。応答がない場合、「現在おかげになった電話は通話できません」や「電源が入っていません」というメッセージが流れます。「電源が入っていません」という返答があれば、その人が殉死した可能性が高いですが、「通話できません」となれば、ネットワークがダウンしている可能性が高く、まだ生きているという希望が残ります。そうであれば友人の近くにいる人々に連絡を取り、無事を確認しようとします。携帯電話の持ち主が生きているか殉死しているかの確かな情報を得るまで、試行錯誤が続きます。だからこそ、朝に「おはよう」と言うとき、それは無事であることを意味します。

戦争中の他の行動もその意味が変わっていきます。その一つに、避難先で朝トイレに行くときのことが挙げられます。右手には水 2ℓ のボトルとトイレットペーパーを持ち、ビデの代わりとし、左手には水バケツと洗面器を持ち、水洗機の代わりとします。もしトイレが空いているのを見たら「なんて素晴らしい世界だ」とつぶやきながら、笑顔で座ります。

読者の皆さんに、なぜボトルやバケツ、トイレットペーパー、掃除道具を持ってトイレに行くのかを説明しますと、短く言えば、私たち避難民が一つの家の中で百人以上いるからです。トイレは一つだけで、常に占領されており、行列ができます。戦争の初めの頃はトイレの水洗機を使っていましたが、家主が 1,000 ℥ のタンクに水を補充するのに二日かかり、一日中トイレが使われ、タンクは二日で空になります。その結果バスルームのタンクはロックされ、それからは各家庭が自分たちで水を購入し、トイレも含めてすべての水の使用を自分たちで対応するようになりました。

一週間前、友人がコーヒーに招待してくれました。しばらくしてトイレに行きたくなり、南部に避難して以来、初めてあるべきものがあるトイレに入り、以前の生活を思い出しました。友人宅のそのトイレに座ったとき、私たちが毎秒どれだけの苦しみを経験しているのかを実感しました。私たちは人間性を失い始め、50 年前どころか 100 年前に戻ってしまったようです。

壊れた家や道路を再建することはできますが、壊れた人々、思い出、感情、行動、文化、教育、関係、制度を元に戻すことはできません。これから日々に何か残されているなら、神の助けを借りて、それを乗り越えなければなりません。私たちの夢は歪み、願いは縮小し、些細なことにも喜びを感じるようになりました。

例えば、市場に行きたいとき、ロバではなく馬が止まってくれたら「なんてラッキーなんだ、今日は素晴らしい一日になりそうだ！」と自分に言い聞かせます。そして馬が尾を上げて排泄

を始めても、不思議な事に乗客の誰もそれを気にせず、臭いにも気にせず、まるで歩いているかのように通りの両側の商品を熱心に見ています。カートの運転手は、乗客の一人が何かを買うために少し停車しても気にせず、私たちもその乗客が戻るまで待ちます。道中、乗客はカートの上から、毎朝上下する株式市場のような商品の価格について大声で尋ねます……今日は砂糖1キロいくら？ネスカフェはいくら？いくら、いくら？……

ガザには世界中、エジプト、トルコ、アラブ首長国連邦、ヨルダン、ベトナム、クウェート、中国、日本、アメリカ、スペイン、インド、そしてアフリカ諸国から缶詰が届きます。それらは私たちのために作られたものです。猫や犬に拒否されるものも多くありますが、私たちは胃の中に放り込みます。ミサイルで死ななかった者は別の何かで死にます。缶詰は多くあり、死因の多くは癌です。

戦争の只中ではどこを向いてもあるのは痛み！人々の顔の青白さに服装や靴に涙が出来ます。列を作つて並ぶ子供たち、大人たちが持つている容器には、最悪の料理人が作った最悪の料理が入っています。それを食べるしかなく、何時間もその列に並び続けることだってあります。

怒りを抑え、感情が自分を殺し、心の痛みを感じながら、私たちに起こったこと、起こっていること、これから起こることに苦します。そして、アメリカが民間人の命を大切にしていると言うニュースを聞き、怒りを覚えてチャンネルを変えます。すると、アメリカが最新のミサイル、爆弾、飛行機、爆発物をイスラエルに輸出したというニュースを耳にし、イスラエルが私たちの命を守ろうと懸命に努力しているというニュースも聞きます。しかし、これまでに確認された殉死者の数は33,000人に達し、そのうち14,000人は子供で、残りの大半は女性と高齢者です。

少し眠ろうとしますが、頭の中で質問が戦い続けます。そして、どの質問にも答えを見つけることができず、私たちがどこへ向かっているのか、この状態がいつまで続くのかを知ることができません。

2024年4月1日
アリー・アブー・ヤースイーン
翻訳：藤田ヒロシ

オリジナル (PDF) | [英語](#) | [アラビア語](#) |